純潔時代

ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
純潔時代

【Ｎコード】
Ｎ３５９４ＢＦ

【作者名】
ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】
１９世紀、オナニーは有害なものと本気で信じられていた。見つかれば激しく責められ、医者によってクリトリスを焼きつぶされた少女も少なからずいた。科学の進歩と共にオナニーは体に悪いものではないと広く知られるようになり、男はもちろん女の子も当たり前の行動としてオナニーをするようになった。しかし何事もある一定まで進めば反動が来る。
２１世紀半ば、多発する性犯罪は性の早熟化が原因であり特にオナ

ニーを早くからすることは性への目覚めにつながるという風潮が生まれた。性犯罪の若年化は後を絶たず、性に関する知識不足も大きな要因と考えられた。そこで政府は１８歳未満の性行為を一切禁止とする方針を明らかにした。そして特に女子は自らの体を守るため、早期に性に親しまないよう、オナニーを防止することが重要とされた。一度火がつけば流行は早い。たちまち少年少女のオナニーを防止する方策が考えられた。

その犠牲となった少年少女の苦悩をそれぞれの角度から描いていく。

誕生前夜（前書き）

１９世紀、オナニーは有害なものと本気で信じられていた。見つかれば激しく責められ、医者によってクリトリスを焼きつぶされた少女も少なからずいた。科学の進歩と共にオナニーは体に悪いものではないと広く知られるようになり、男はもちろん女の子も当たり前の行動としてオナニーをするようになった。しかし何事もある一定まで進めば反動が来る。

２１世紀半ば、多発する性犯罪は性の早熟化が原因であり特にオナニーを早くからすることは性への目覚めにつながるという風潮が生まれた。性犯罪の若年化は後を絶たず、性に関する知識不足も大きな要因と考えられた。そこで政府は１８歳未満の性行為を一切禁止とする方針を明らかにした。そして特に女子は自らの体を守るため、早期に性に親しまないよう、オナニーを防止することが重要とされた。一度火がつけば流行は早い。たちまち少年少女のオナニーを防止する方策が考えられた。

※本作品は筆者のフィクションであり、特定の宗教団体や政治家等が推進する純潔教育とは一切関係ありません。予めご承知下さい。

※筆者は性の低年齢化、特に中高生のセックスに危惧を抱いておりますがその対策としてこのような処置を推奨するような運動は行っておりませんので、ご理解下さい。

誕生前夜

校庭に桜が咲き誇り、新学年がはじまるというのに生徒たちの顔は一様に暗く緊張している。これから体育館に移動し、体の中で最も敏感な性器に対するとある処置を受けることになっていた。どんなに大義名分を並べて処置の必要性を述べられようとも苦痛に対する不安はぬぐい去れるものではない。

１９世紀、オナニーは有害なものと本気で信じられていた。見つかれば激しく責められ、医者によってクリトリスを焼きつぶされた少女も少なからずいた。科学の進歩と共にオナニーは体に悪いものではないと広く知られるようになり、男はもちろん女の子も当たり前の行動としてオナニーをするようになった。しかし何事もある一定まで進めば反動が来る。２１世紀半ば、多発する性犯罪は性の早熟化が原因であり特にオナニーを早くからすることは性への目覚めにつながるという風潮が生まれた。性犯罪の若年化は後を絶たず、性に関する知識不足も大きな要因と考えられた。そこで政府は１８歳未満の性行為を一切禁止とする方針を明らかにした。ラブホテルの利用にはタスポのような年齢確認カード提示が義務づけられ、コンドームや検査薬の販売、産婦人科におけるピルの処方も年齢確認が必要になった。アダルト系の雑誌やグラビアも取り締まりが厳しくなり、以前のような性の寛容さは身を潜めてしまった。そして特に女子は自らの体を守るため、早期に性に親しまないよう、オナニーを防止することが重要とされた。一度火がつけば流行は早い。たちまち少年少女のオナニーを防止する方策が考えられた。

男子は中学生になってすぐにペニスの包皮を切り落とすことにな

った。こうすることで快感が減少し、精神的ショックも与えることが出来ると考えられた。包皮の一部だけか、亀頭を覆う包皮すべてかが議論され、できる限りオナニーを防止するためには性感帯を含めできるだけ皮を多く切ることがのぞましいとされた。しかし本格的な包茎手術をするには費用も手間もかかる。また苦痛を与えるためには短い時間で麻酔をせずにすることが望ましい。そこで包皮を出来るだけ伸ばし、なるべき亀頭に包皮が残らないようメスで一気に切り落とす方法が採用された。

　女子についてはクリトリスを切除するという激しい意見もあったが、将来のことを考えてクリトリスは残しておくべきということになった。その代わり中学１年生から高校３年生までの６年間、クリトリスに灸をすえ、軽いやけど状態をおわせることになった。当分続く痛みと精神的苦痛の両面によりオナニーを取り締まることが出来ると考えられた。なおそれでもオナニーをした場合など、親がクリトリスの切除を望むケースも出てきた。この場合は親の署名があれば高校生以上の女子は本人の意思に関係なく局所麻酔をした上でクリトリスをメスで切除すること、または灸を長時間あててそのまま焼きつぶしてしまうことも可とされた。

　男子に対しては初年度のみ中学１年生から高校３年生まで行われ、翌年からは中学１年生のみが対象となる。麻酔なしで切られる前に包茎手術を受けようとする生徒が続出する可能性を考慮し、１８歳未満の包茎手術は全面禁止、包茎矯正器具の販売も禁じられた。これは一年間だけの処置で、翌年からは小学生以下が包茎手術禁止となり、中学２年生以上が残った皮をすべて取り除くことは可となった。

　女子は毎年、中学１年生から高校３年生まで行われる。専用の灸が開発され、大量生産された。高校生に入りクリトリスの切除を受けるか灸で焼きつぶされた生徒以外は６年間受け続ける。オナニー

を覚える女子は少ないが、それでもしている場面を親に発見されてしまう生徒もいる。あるいは躾の厳しい家庭に育った少女がクリトリスを完全除去されることになり、どの学校でも学年1人くらいは余りに残酷な処置をされてしまう。

学校では性犯罪に関するビデオを見せ、早くから性に関心を持つことがいかに危険かと教え込む。それを防止する有効な手段としてこの処置があるのだから素直に受け入れるよう促される。PTAの中には口うるさい人間もいるので、一応は親の同意書を毎回とる。しかし過保護な親が子どもを守ろうとしても、クラスの大半が処置を受ける中で免除されてはイジメの対象になりうる。結局は生徒自身も自分だけ苦痛を避けるよりは皆と同じ処置を受けることを望んでしまう。だから受けないのはクラスで1人か2人いるかいないかであり、全員が受けるクラスも多い。

ビデオを見て目的を説明し、その上で処置を受ける手順について説明される。もし暴れたらどうなるかといった脅しもされ、恐怖でいっぱいになる。それでも刻一刻、処置の時間は迫ってきている。

百草をあてられる女子中学生

都心部にあるこの公立中学校でも今日、女子生徒約250名が性器を百草で焼かれる。ホームルームに集合した女子生徒たちの顔は一様に緊張している。まして今年はじめて処置を受ける中学1年生たちはまだ4月だというのに汗ばむほど緊張していた。できることなら逃げ出したい、しかし逃げ出しても結局はつかまってしまい後でもっとひどい仕打ちを受けることを知っていた。

1年1組1番の生徒から順に、体育館へ移動して処置を受ける。1年生からはじめるのは先輩たちの激しい悲鳴を長く聞き続けさせないためである。男子と女子では受ける処置が違うため、同じ日に行うことはできない。男子は明日行うため、今日は自宅学習を命じられて登校していない。1クラスに女子は20人程度であるから、呼ばれたら全員がジャージを着て体育館へと向かう。

始業式の後、男女に分かれてこの処置を行う理由を延々と説明された。まずはビデオが流され世間に性犯罪が蔓延していること、性の対象が低年齢化していること、体は自分自身で守らねばならないことが諭され、その一環として性への関心を高めるオナニーは決してすべきではないとされ、オナニー防止に大きな効果がある処置を受けることは君たちにとって実にありがたいことだと説明がされた。どんな大義名分があろうとも、生徒たちの頭にあるのは敏感な部分に押しつけられる百草の痛みだけである。ビデオの後、当日の流れが説明される。もし素直に言うことを聞かず暴れた場合、必要以上に叫び声をあげた場合などは、通常15秒と定められている灸の時

間を延長することが伝えられた。素直に指示に従えばちょっとの痛みですぐに終わるのだから我慢しろということだった。もちろん敏感な性器に僅かな時間でも百草をあてられたら激痛が走るに決まっている。そしてもし暴れて膣や尿道口に灸があたるようなことがあれば感染してより深い痛みに襲われることになる。暴れると君たち自身が痛い目にあうと徹底的に脅された。

体育館が近づくと既に百草のにおいがしていた。益々恐怖心があおられる。ほぼ同じ日に全国の学校で処置が行われるから、設備も人手も足りない。そのため、この学校でも派遣されてきた5人の医師と看護師のほかに女性教諭が10名動員され、更に15名の女子大生ヘルパーが参加していた。出席番号1番の青山幸子・2番の飯田加奈子・3番の江藤明子・4番の川島奈々子・5番の今野令美が体育館の中に入っていった。体育館の入り口側には机を並べてつくられた簡単な台が5つ並び、机の上にシーツを重ねて簡易ベッドのような形にしてあった。5つの台は仕切りがなく、体育館の入り口から丸見えの状態である。台の横に立つと、ジャージの下とショーツを脱いでかごの中に入れるよう指示があった。ここですぐに動かないとお灸の時間が延びてしまう。5人は顔を見合わせると覚悟を決め、一気に手をかけてジャージとショーツを脱ぎとり、かごに入れると勢いをつけて台に上った。

最初にされるのは剃毛である。中3となれば多くの少女が発毛しており剃毛の対象となるが中1では数人である。最初の5人の中では飯田加奈子のみが対象となった。川島奈々子以外の3人も発毛はしているが、恥丘部にある毛は不問である。陰唇の周りにある毛は感染症の危険性があるため剃っておかねばならない。早速飯田加奈子の股間の下に新聞紙がひかれ、看護師の鮮やかな手で毛が

剃られていく。その屈辱に加奈子は涙を目に浮かべた。それを見た江藤明子もこれから起きることへの恐怖からもらい泣きしてしまった。自分で毛を剃ってくるのであれば少しは羞恥心を紛らすことが出来るが、傷をつけてはいけないということで自分で剃毛することは禁じられていた。

剃毛が終わると次は看護師によってクリトリスの包皮を剥かれる。このとき、股を大きく開いて股間がよく見えるようにしなければならない。無意識に足を閉じようとしてしまうが、あまりに抵抗すると時間延長の罰が待っているため、必死に足を開いて屈辱に耐えている。上半身は女子大生のヘルパーに固定されて動けない。女性教諭は横に立ち、様々な指示をする。ほとんどの生徒にとって自分でも殆ど触れたことがない場所に手を伸ばされ、包皮を剥いていかれるのは恥ずかしいし痛いしくすぐったい。続いてアルコールをしめしたガーゼを使い、クリトリスを中心とする外陰部をしっかり拭う。なんともいえない感覚に身をよじりながら必死に耐える。そのとき、川島奈々子が突然大声をあげて泣き出してしまった。

「いやだよぉ～もうやめてよぉ～」

しかし勿論処置が止められることはなく、横にいた教員が頬を叩いた。そして泣きじゃくる奈々子に5秒間の時間延長が申し渡された。更に声をあげて泣きたい気分だったが、そんなことをしたら最悪の場合、クリトリスが焼けつぶれるほど百草を当てられてしまう。

ここまで終わると生徒たちは体を起こし、下半身裸のまま自らのカゴをもって体育館の奥側へと移動する。手前側の処置スペースは

すぐにシーツが直され、準備ができ次第、次の５人が呼ばれる。最初に消毒を受けた５人は震える足で、今度は個々に仕切られた処置ブースに入っていく。かごを置くと先程同様にベッドの上にのぼり、大きく股を開く。今度は一応医療用の簡易ベッドだった。ベッドにあがるとあっという間に上半身と腕はベルトで固定されてしまった。更に片足ずつ持ち上げると、大きく股を開いて陰部を御開帳した状態で両足をそれぞれ固定してしまう。これでどんなに叫ぼうと暴れようとも逃げ出すことはもうできない。

準備が出来たブースから、百草に火がつけられる。こげつくような臭いが体育館の中に充満していくと同時に、それが少女の敏感なクリトリスにあてられる。最初にあてられた今野令美が切り裂けるような叫び声をあげた。次々と各ブースから叫び声が聞こえてくる。当たり前だが耐えきれるような痛みではない。先程５秒延長を申し渡された川島奈々子に加え、足を強く閉じて灸がうまくあてられないようにした飯田加奈子に１０秒間の時間延長が申し渡される。最初にクリトリスにあてられてから数秒で、百草の火は最高温に達する。だんだん脳天を突き抜けるような痛みが股間から襲ってくる。

「ぎゃー許して」「もうやめて～」「お母さん助けて～」「痛いよ熱いよ～」

様々な声が体育館の外まで響き渡る。前の生徒が泣き叫ぶ声を聞いて体育館の外で待機していた生徒も泣き出した。しかしどんなに叫んでも１５秒きっかりになるまでやめてもらえることはない。百草をクリトリスにおしつけるのだけは危険が伴うので、資格をもっ

た医師が行う。女医だけでは足りないので、男性医者も少なくない。しかし恥ずかしさなど感じている余裕もないほど熱くて痛い。

クリトリスを焼かれた少女たちにとって最後の苦痛は軟膏を塗られる瞬間である。やけどをした状態になったクリトリスにたっぷりと塗りつけられ、一度は収まった叫び声がまた起きる。それが終わるとクリトリスの上にガーゼがあてがわれ、ようやくすべての処置が終わる。しかし患部に直接ショーツがあたると激痛が走るため、大抵は直接ジャージをはく。あるいはそこまで制服のスカートを持参して、何もつけない状態ではいてもよかった。この時点でほとんどの少女が目に涙を浮かべている。出席番号1番から5番の少女がクリトリスをやかれたその場所で、すぐに次の生徒たちがクリトリスを焼かれていく。数分ごとにのどを切り裂くような叫び声が聞こえ、2時間以上かけてすべての処置が終わった。

人生たった一度でもこんな苦痛は受けたくない、しかし彼女たちのクリトリスはやけどはしているが確かに残っている。1ヶ月もすればやけどの跡は小さくなり、痛みも癒えてくる。しかしその一年後、再び同じ処置を受けなければならない。1年生が終わり2年生が終わると、3回目となる最上級生たちが処置を受ける。何回受けてもなれるものでは決してない。体も心も確かに鮮烈に覚えている痛みに、また襲われるのである。進級や入学など、本来はおめでたく明るくウキウキする季節である。校庭の桜が咲き誇ってさわやかな風が吹いているにもかかわらず、女子中学生たちの心と体は苦痛で満たされているのであった。

削ぎ落とされる女子高生

青少年の性犯罪防止という名目のもと、女子中高生のクリトリスにお灸をすえるという激しい処置が合法化され、６年目に入った。今年の高校３年生が中学１年生の時、この処置は始まった。彼女たちは過去５回、この処置を否応なしに受けさせられてきた。そんな苦痛も今年を乗り切れば二度と味わずにすむ。だからといってあの熱さに耐えられるというわけではないが、心なしか高校３年生の顔は後輩たちと比較すれば明るかった。

高校生になっても処置の手順は中学生の時と変わらない。特にこの恵比寿女子学園のような中高一貫の学校では、処置を受ける会場も同じならスタッフもほぼ毎年同一である。変わることといえば卒業生の先輩がヘルパーとして母校に戻ってくることがある。時には仲が良かった先輩におさえつけられて灸を据えられることもあり、そういう時はどちらも辛かった。導入当初と違い、ヘルパーのスタッフたちも処置の経験者が大半を占めるようになっていた。彼女たちはどんなに拒否しようと事態が良くなるということは絶対あり得ない、と知っていた。激しい苦痛を伴うこの処置を一番被害なくすませるには、素直に従うことしかないとわかっていた。

ただし高校生になると、剃毛・消毒のあと、処置台に移動して灸を据える前に一つの作業が加わる。それは先の鋭いピンセットでクリトリス本体をつまみ、皮の中から引っ張り出すという作業であった。神経の塊を押しつぶされるようなこの処置は言うまでもなく激痛が走る。性器が成熟してくることで、より強い刺激を与えるため

に加えられた処置である。ほとんどの生徒はピンセットが離された瞬間にはクリトリスは皮の中へと戻ってしまうが、たとえ先端だけでも露出していることにより、皮の上から灸を据えられるより更に熱さが伝わる。

それでも彼女たちは在校中に3回、その処置を受けさえすれば晴れて性の自由を手にいれる。熱い灸をすえられ一時的にやけど状態にはなるが、クリトリスの性感はしっかり残っている。しかしそれすらをも奪われてしまう少女たちがごく一部、存在する。高校生はオナニーをしているところや恋人といることが見つかった場合など、親が特別に申請書を出せばクリトリスそのものを取り除いてしまうことが認められていた。彼女たちは学校ではなく、近くの指定病院に集められてもっとも敏感な性感を、まだ本格的に使う前に取り除かれてしまう。恵比寿女子学園では今年、高校1年生3人／高校2年生2人／高校3年生2人の計7人が親に手をひかれ、無理矢理病院につれてこられていた。

高校1年生は①今田夏美　②岩本瑠璃子　③福山清子　の3人である。今田夏美の母は教育熱心で、娘が恋愛に興味をもったりすることがないよう予防として性器切除を希望した。岩本瑠璃子は中学時代から男子との交遊が多く、このままでは性体験をしてしまうと懸念した父が性器の切除を命じた。そして福山清子の両親は大変厳格で、娘には必要以上に厳しい試練を与えている。今回も躾の一環として生活に不要なクリトリスをそぎ落とすことにしていた。

高校2年生は①森野美咲　②渡部千尋　の2人である。森野美咲

はこれまでも複数の男子と恋愛経験があった。去年の暮れ、彼氏と歩いているところを親に発見され、今回の処置が決まった。渡部千尋は大変厳しい躾の家庭に育った。昨年も性器切除が検討されたが、勉強をがんばっているということから何とか免除された。しかし昨年の総合成績で学年１０位に入れないことから、今年は受けさせられる。

高校３年生は①内野美鈴　②大島泰子　の２人である。この２人も過去５回、クリトリスに熱い灸を据えられてきた。この春を耐えれば開放されるはずだったのに、これまで散々苦痛を与えられた上で更にそぎ落とされるという最悪の事態が待っていた。内野美鈴は昨年、勉強に行き詰まってついショーツに手を入れたところを母に見つかったことから受けさせられる。何度も許しを請うたが母は認めず今朝も首根っこを掴んで連れてこられた。大島泰子は物静かな少女で勉強を熱心であった。しかし大学受験が本格化するにあたり、余計な雑音に惑わされないようにという心配性の両親により、本人の知らないところで切除が決まってしまった。

この中で①今田真美　②岩本瑠璃子　③大島泰子　の３人は麻酔をした上での処置となるが、残りの４人は麻酔なしでの処置が申し込まれていた。更に①福山清子　②森野美咲　③大島泰子の３人は何とクリトリスだけでなく小陰唇の切除もオプションとして申し込まれていた。ちなみにクリトリスを麻酔なしでそぎ落とすだけならば費用は一切かからない。小陰唇の切除は＋２０００円、麻酔を打つ場合は＋７０００円となっていた。麻酔代は高いことから、費用を出す親たちから敬遠されがちだった。

控え室に体操着姿の生徒7人と付き添いの母親たち、そして高校から派遣された女性教諭2名が集合した。当たり前のことであるが生徒たちの顔は青白い。中には既に泣き出している者、もう一度母親に懇願する者もいた。その隣の処置室では準備がどんどん整っていた。

最初に名前を呼ばれたのは麻酔をした上でクリトリスのみをそぎ落とす1年生の①今田真美と②岩本瑠璃子である。クリトリスを奪われるという事実は大変大きいが、麻酔をするからこの場で痛みは殆どない。その分、麻酔が切れると相当な痛みに襲われるのであるが、そのことは知るよしもない。

まずは今田真美から処置室内に入っていった。処置室内で親が必要事項に記入し、署名をすることで手続きは完了する。真美は無言で母を見て哀願したが、母は表情を変えずサインをしてしまった。こうなったらどんなに暴れても手術は行われる。躊躇する真美はズボンとショーツを脱がされ、ベッドの上に寝かされた。あっという間に剃毛が行われ、消毒がなされた。恥ずかしさと恐怖で泣き出す真美ではあるが、誰一人表情を変えず処置が進んでいく。遂に細い麻酔針が真美のクリトリスに突き刺さった。想像以上の痛みに真美は叫び声をあげた。その声は控え室にも届き、待機する生徒たちの顔が曇った。麻酔が効いたことを確認すると医師はメスを手に取り、まずはクリトリスの包皮に切り込みをいれた。
続いてむき出しになったクリトリスをピンセットで引っ張り出し、できるだけ根元部分にメスをいれ、そぎ落とした。無論、大量の出血がある。痛いわけではないが、敏感な股間でなされていることに我慢ができず、真美はずっと泣いていた。最後に消毒をし、ガーゼ

があてられて処置は終わった。終わるとすぐに岩本瑠璃子と母が呼ばれた。瑠璃子はもう諦めていた。親に哀願するのもプライドが許さないので、母がサインをする前にさっさと下半身裸になりベッドへ登った。麻酔の瞬間は顔をしかめたが終始叫び声をあげず、淡々と処置を終えた。

次は麻酔をして小陰唇までそぎ落とす3年生の大島泰子が呼ばれた。処置は途中まで、先程の2人と全く一緒である。クリトリスの包皮に切り込みを入れる前に左右の小陰唇にメスをいれ、そぎ落とす。その上で小陰唇とつながっているクリトリスの包皮にも切り込みをいれ、むき出しにしたクリトリスを強く引っ張り、根元から切るのである。泰子は控え室で涙を流し、母に哀願した。これから本当に勉強を頑張るから切らないでほしい、と頼んだ。せめてクリトリスだけにしてもらえないかと期待したが、母は冷酷に娘の願いを握りつぶした。泰子は仕方なく、自分からショーツを脱いでベッドにあがった。

前半3人が終わり、ここからは麻酔なしの処置がはじまる。痛みは先程までと比較にならない。彼女たちは一度全裸にされ、丈の短い手術着に着替えさせられる。時間短縮のため、更衣室などはなく母や医師の前で着替えなければならない。更に心拍数など検査をした上での処置となる。呼ばれたのは麻酔をせずクリトリスをそぎ落とされる ①2年生の渡部千尋 と ②3年生の内野美鈴 である。千尋は控え室で何度も母に哀願した。これからは勉強を頑張る、いい成績を取るからといって手術中止を訴えた。母も一度は考えたが、熟考の上でサインをしてしまった。手術が避けられないと悟った千

尋は麻酔をしてほしいとベッドから訴えた。「お母さん～お願い、麻酔だけはしてもらって～痛いのは嫌だ～」と訴えたが、署名はくつがえらない。麻酔をしない場合、包皮に切り込みをいれない。消毒が終わると医師は千尋のクリトリス包皮を慎重に剥き、細長いピンセットでできるだけ根元をつまみ、力いっぱい引っ張った。あまりの痛さに悲鳴をあげた千尋は次の瞬間、病院中に聞こえるような声で泣き叫んだ。痛い痛いと言っているようだが、言葉にならない声だった。クリトリスの根元に麻酔なしで鋭利なメスをいれられるのだから当然だ。鋭利なメスはほんの数秒で千尋のクリトリスを切り落とした。更に辛い仕打ちが待っている、消毒である。傷口に生理食塩水は本当にしみる。千尋は体をよじって暴れた。

5人目は内野美鈴である。美鈴は控え室にいる時から声をあげ、母に手術中止を懇願した。オナニーを覚えたのは高校に入ってすぐのことである。それまで母には知られることなくやってきたが、その日は実に運悪く見つかってしまった。たった一度見つけただけにもかかわらず、母はクリトリスの切除を命じた。女の子が許される行為ではない、はしたない行動をする原因となるものは取り除かれねばならないと断じた。美鈴はそれでも諦めなかった。「もう二度とやらないと約束します」「絶対にやらないから許してママ」と訴え続けた。しかし母は全く躊躇せず、署名をしてしまった。嫌がりその場に腰をおろしてうずくまってしまった美鈴を、看護婦たちは無情にも引き起こしてベッドへ上げた。すばやく全身をベルトで固定してしまう。もうどんなに暴れても体は固定されて動けない。それでも美鈴は母に向かい、中止させてと叫ぶ。看護師や医師にも哀願するが、彼女たちも無情に淡々と作業を進めていくだけである。大泣きしながら毛を剃られ、消毒をされた。そしてピンセットがクリトリスの根元部分をつまんだ瞬間、体をよじって逃げだそうとした。もちろん少女が暴れたくらいでは手術台は動かない。首を痛め

ないよう頭も押さえつけられ、どうにも抵抗できない状態で下半身を突き抜けるような痛みが襲った。終わる頃には美鈴は狂乱していた。その声を聞いて残る二人も益々顔をこわばらせた。

最後に麻酔をせずに小陰唇までそぎ落とす　①1年生の福山清子と②2年生の森野美咲　が呼ばれた。福山清子は、親に逆らうことは余計厳しい仕打ちが待っているだけだと認識していた。それだけに名前を呼ばれると素直に従い、ベッドへと上がった。心の中では不安と恐怖、羞恥心でいっぱいであるがそれを表情に出すことは許されない。仕方なく淡々と受け止めている。一方で森野美咲は激しく抵抗した。普段から親に反抗的な彼女はこの場に及んでも母を攻撃し、処置を中止させようとしていた。しかし母は容赦しない。美咲の言葉には耳を傾けずさっさとサインをしてしまった。看護婦にも悪態をつく美咲であったが大人に数人がかりで押さえつけられては力負けしてしまう。あっという間に下半身の着衣をはぎ取られベッドで横にされると、暴れないようにベルトで固定された。清子も美咲もあらんばかりの声をあげて、泣き叫んだ。性器をそぎ落とされる痛みの前には清子の我慢強さも美咲のプライドもない。どんなに両親が怖くても清子は声をあげて泣き叫んだ。美咲は恨みの言葉を声の限りに叫び続けた。しかしどんなに声をあげても処置はとめられない。まず小陰唇がそぎ落とされ、次にクリトリスが根元から切り落とされてしまう。脳天を突き抜ける痛みと大量の出血があり、ようやく手術は終わる。

手術が終われば教師に報告し、母に付き添われて帰宅する。術後、3日間は公休と認められる。3日間は自宅ベッドの上でひたすら痛みと闘う。排尿の際や消毒、包帯の取り替えにはいつも激痛が伴う。

まだ彼女たちの試練は第一段階に過ぎない。

焼き潰される高校三年女子生徒

青少年性犯罪防止という名目のもと、女性器をお灸でやかれる儀式がはじまり6年目を迎えた。今年の高校3年生が中学に入った年、儀式ははじまった。中高一貫の恵比寿女子学園では全校生徒が激しい苦痛を共有してきた。今年乗り切れば、もうこのような残酷な処置は受けなくて済む。

6年目の儀式が行われる日、再び繰り返されるあの苦痛に表情がこわばる女子高生であるが、今年で終わりと思うと少しは安堵の表情を浮かべている者もいた。今日、数十秒の痛みに耐えればこれからはクリトリスを痛みつけられることもなく、安心して性生活を楽しむことができる。

今日、学年でも有数の成績を持つ内野美鈴と大島泰子は学校に来ていない。彼女たちは今日、病院でより深刻な施術を受けている。内野美鈴はショーツに手をいれたところを母に見つかってしまい、許しを請うたが聞き入れられず、麻酔もしてもらえずにクリトリスを切り落とされる。大島泰子は心配性の両親が、性に興味を持って勉強に影響が出ないようにという理由で、クリトリスに加えて小陰唇までを切り落とされる。麻酔を打ってからの施術なので痛みは少ないが、女性器の大半を奪われてしまう精神的ショックは大きい。せめて2年前にされていれば苦痛を受ける回数が少なくて済んだものを、すでに5回焼かれた上での切除であるからショックは増している。

そして他にも3人、今日学校に来ていない同級生が居た。彼女たちは両親の判断により、既にクリトリスを切り落とされていた。3人とは①大野みのり　②駒野彩佳　③小木民子　である。

①大野みのりは内気な性格で、部屋に一人閉じこもって小説などを読むことが多かった。中学生になってすぐにクリトリスを焼かれ、そのケアをしているうちにオナニーを覚えてしまった。一人の時間にオナニーにふけいることが彼女の日課となった。それが中学2年の夏、母に発見されてしまう。それを見つけた母は、高校生になったらクリトリスを切り落とすことを決めていた。高校に進学してすぐ、皆がクリトリスを焼かれている日、駒野彩佳と共に病院へいった大野みのりはクリトリスを除去された。比較的裕福なこともあり、麻酔はしてもらえたので痛みはそれほどなかった。彼女にとってオナニーができなくなってしまうことが何より辛かった。

②駒野彩佳は中学時代から何度も親が呼び出しを受けるような素行不良で、ようやく高校に入れたという生徒である。高校にあがってすぐ、両親はクリトリスも小陰唇も切除することを命じた。その上、麻酔をしないでの切除という最も厳しい選択をされてしまった。部屋にとじこもって拒否していたが、父親が無理矢理体を抱きかかえ、病院に連れて行ってしまった。器具で体を頑丈に固定され、暴れながらも大切な女性器を奪われてしまった。

③選抜クラスに在籍する小木民子は高校1年生の3学期テストの結果が悪く、選抜落ちスレスレの成績だった。この結果に激怒した母は、一切の雑音を断ち切って2年間勉強することを命じた。熱中

していたバスケ部もやめさせられ、趣味の漫画も全て処分された。
そして高校2年の春、皆がクリトリスを焼かれている時、学年で一人病院に連れて行かれ、麻酔もせずにクリトリスを切り落とされた。切除の瞬間までは焼かれる生徒とさほど差はない。ピンセットで引っ張られ神経に食い込む痛みに耐えていた次の瞬間、激痛が全身を襲う。切るのは僅か数ミリで、数秒のことであるが、痛みは当面続く。

既にクリトリスのない3人と、今日病院で切り落とされる2人を除いた全校生徒が体育室へ集められ今年も同じ光景が繰り返される。しかしその中に3人、より深刻な状況にある女子生徒がいた。これは他の生徒のように数十秒でお灸をやめず、そのまま暫くの間おしつけてクリトリスを完全に焼き潰してしまうという高校3年生だけに提示されるオプションであった。クリトリスに灸をあてられるのは今年が最後である。それ以後の男性関係などを心配する保護者の要望により、そのまま焼き潰してしまうというオプションが加えられたのだ。麻酔無しでクリトリスを切られるのと同様、費用はかからないことから保護者の中には興味を示す者も少なくない。麻酔無しで切られることと灸で焼かれること、どちらがマシかは難しいところである。前者は出血が多いが本当の激痛は一瞬である。後者は出血が少ないが長時間に亘って激しい痛みを伴うことになる。

今回受けさせられるのは①滝本遼子　②青井千代子　③藤野昌子の3人である。学級委員長である滝本遼子は交友関係が広く、それを心配した母が決断した。由緒正しい家庭の青井千代子は将来見

合い結婚させることを親は考えており、勝手な恋愛をしないようにということで今回の決断に至った。素行も学業も優秀な藤野昌子は母がママ友から仕入れた情報によりクリトリスの除去が決まった。本当なら切除に連れて行かれる予定だったが、本人がそれなら焼かれる方がまだいいと希望した。この3人は、同級生が全て受け終わった後にお灸で焼かれる。当然ながら絶叫する声は他と比類できるものではなくその声を聞いた他の生徒が動揺することを避ける為である。そしてもう一つ、押さえつけるのに人手が必要になることも最後に回される理由だった。

剃毛と消毒までは同級生と一緒に1組から順番に受ける。それからベッドに誘導されず、バスタオルを羽織った状態で同級生の悲鳴をひたすら聞く。そして最後に悲劇が待っている。既に中学1年生から高校2年生までのお灸が終わり、同級生も最後の処置を受けていた。体育館には大勢のスタッフと3人だけが残された。3人だけなので同時にお灸をあてられる。3人がベッドに寝ると、頭に下には動いて首を痛めないよう柔らかい毛布がいれられた。そして上半身を4人かかりで押さえつける。両足を特段大きく開かされ、それぞれの足を2人ずつで押さえつけた。舌をかまないよう口に詰め物をいれられていよいよクリトリス焼却がはじまる。これまでとは違う、特注の大きなお灸が用意された。

他の生徒に使うものより大きな百草は、温度もより熱くなるようにできていた。あてられた瞬間の痛みは今までと大差ないが、十秒を過ぎる辺りから極端に熱さを感じるようになっていく。しかしこれはまだほんの序の口である。クリトリスを完全に焼き潰すまで、

１０分以上かかる。時々口の中の詰め物が外され、交換される時、学内に響き渡りそうな叫び声が聞こえる。痛いとか助けてとかママとか叫んでいるようだが、何をいっているのか言葉にならない。痛いとか熱いとか、そんな言葉で片付けられるような苦痛ではない。これを行うのは熟練の医師であるが、彼らも慎重な手つきで行う。少しでもあてところを間違えればクリトリスは焼けず、膣などを傷つけてしまうことがある。排尿ができるようにしなければならないので、固定する方も押しつける方も真剣である。途中何度か百草を取り替え右から左から、角度をかえて小さなクリトリスを完膚なきまでに潰していく。どうしても焼き切れない場合は最後に残った部分をメスで切り離すこともある。この日も滝本遼子だけは焼き切れず、残っていた部分をメスで切られた。

クリトリスが焼き潰されると詰め物が外されるがまだ押さえつけ続ける。焼き潰すのと同じくらいの苦痛を与える消毒があり、軟膏の塗りつけがある。最後にたっぷり軟膏を塗られた股間にガーゼを強くおしつけ、テープでとめる。女性器全体をガーゼで固定され、トイレに行くときは一度外して取り替えなければならない。このやり方を書いた紙を貰うが、大抵は自分一人で出来ず、母が手伝うことになるが、これもまた痛みの伴う処置である。数日はトイレに行くだけでも激しい痛みを感じる。メスで除去された生徒同様、３日間は公休扱いとなるが、その３日間は自室のベッドで痛みに耐えながら泣き続けることになる。

切り落とされる男子中学生

女子生徒は中学1年生から6年にわたり、クリトリスに熱いお灸をすえられる。高校生の中にはごく小数ではあるが、クリトリスをそぎ落とされたり大きなお灸で焼き潰されたりするものもいる。

一方、男子生徒は中学1年生のただ一度だけである。実施1年目は中学2年生から高校3年生まで全国で多くの男子生徒に動揺の処置が行われ、非常に時間を要した。しかし2年目以降は中学2年生以上の生徒は全員が包皮を切り落とされているため、中学1年生だけを対象に行われる。既に小学生以下での包茎手術は法律で禁じられ、矯正器具も販売は中止されている。従って一人だけ麻酔をした上で痛みを軽減して包皮を切るような抜け駆けはできない。

男子生徒に対する処置は、女子生徒に比べて格段に短い。30人程度のクラスであれば1時間以内に、全てが終了する。また傷口もそれほど大きくないため、公欠は翌日のみである。処置の必要性をDVDや教師からの話で延々と聞かされることは男女とも同じだ。要は処置を行うための大義名分に過ぎないということは生徒達もよく知っていた。

時間が来るとクラスごとにジャージ姿となって多目的室に移動する。出席番号の若い順から数人ずつ、処置スペースに向かってそこで下半身裸になる。中学1年生なので除毛は行われない。生徒達はビニルシートをひいた床に、股を開いて体育座りの格好で座らされる。

そして右半身・左半身と肩のあたりを強靭な体格の教師に押さえつけられる。その状態でまず消毒が施される。

意外とこの消毒は痛みが走る。股間に座った医師が容赦なく包皮をむきあげ、亀頭をしっかり消毒していく。真性包茎の生徒も力づくで剥かれてしまう。痛みや何ともいえないくすぐったさで悲鳴をあげる生徒も少なくないが、たちまち体育教官がどなりつける。消毒が終わると今度は両手で包皮を思い切り前に引き延ばす。一度むいてから引っ張ることで、最大限皮を伸ばしておくことができ、切ったときに亀頭へ被る包皮を減らすことが出来る。

いよいよ男性器にメスが入る。医師が医療器具で包皮の先端をつかみ、力いっぱい引っ張った。背後からは教師が押さえつける。皮が最大限伸びきったところで、医師は右手に持った鋭利なメスで男子生徒の包皮を一瞬にして切り落とす。その瞬間、こらえてはいても痛みに耐えきれない少年の苦しそうな声が多目的室へ響き渡る。顔をしかめる生徒のことは見向きもせず、医師は包皮をゴミ袋へと投げ捨ててしまう。先端を切り落とされた包皮からは大量の血が噴き出すが、医師はそこに止血薬を多めに塗り、包帯を巻いて応急処置を施す。

生徒たちは顔をしかめてジャージの短パンをはく。まだパンツをはくことはできない。教室へ戻り、痛みがひいてきた生徒から帰宅する。スタッフはビニルシートを手際よく交換し、次の生徒を呼び出す。こんな調子で次々男子生徒の股間から、包皮が切り落とされていく。